# ＵＳＯよね・・・

Seabolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＵＳＯよね・・・

【Ｎコード】
Ｎ２８１８Ｚ

【作者名】
Ｓｅａｂｏｌｔ

【あらすじ】
突然、お見合いをしろといわれたのぞみ・・・そのお見合いも既に結婚が前提・・・しかも、相手は・・・・・

# 溜息　1

「は～・・・」

溜息をしかでなかった。なぜ私が？・・しかも・・・この年で・・・
まだ高校生なのに・・・・・・
そう自問自答する彼女の名は岡田のぞみ（岡田のぞみ）、彼女にとって今回のことは寝耳に水、天国から地獄とはこのことだった。ただベットの上でただ呆然とし、何度もため息をついては、ついさっきのことを思い出していた。

「えっ～！！お見合い！？・・・どういうこと？」

家に帰ったのぞみはは思わず大声を上げてしまった。のぞみにとって・・・この日、天国と地獄がいっぺんにやって来た。それは2学期が始まってすぐのことだった。

まず最初にやってきたのは天国だった。実はこの日のぞみは中学からの同級生の島田雄二（しまだゆうじ）から学校のチャペルの裏に呼びだされた。そこへ行くと、まだ日に焼けて顔は黒く頭はようやくスポーツ刈くらいまで伸びたすっとした顔立ちをした島田雄二が待っていた。
彼は甲子園へは行けなかったが、野球部のエースで四番、しかも頭もいいと学内でも結構人気のあった。

「島田君、どうしたの？こんなところに呼んで。」

そう話しているのぞみ自体、呼び出された時点で、告白されると言う期待で胸が一杯だった。そして、島田はのぞみの予想通りの話をしてきた。

「岡田！！！おれ・・・ずっとお前のことが好きだった。そして、今も・・・」

目の前で起こっている夢にまで見ていた光景にうっとりとしているのぞみだった。のぞみとしても島田の事が嫌いなわけでなく、答えはむしろＹＥＳと即答したいところだったがここはぐっと我慢した、しかし、島田の最後の一言でのぞみは肩透かしを食らった感じになった。それは、のぞみが近づいて手をとろうとした時だった。

「明日、お前の気持ちを教えてくれ！！」

「えっ？」

「明日、ここでな！！」

のぞみが驚いている間に島田は、さっさとのぞみから離れ去って行った。なんなのよ～！！と思いつつも気分は最高の状態だった。

そんな気分で帰宅したのぞみに悲劇は襲い掛かった。それは、家に帰ったのぞみを父が呼び止めたことから始まった。今思えば、大体、ごく普通のサラリーマンである父は、こんな時間に家にいること自体珍しいと言うかおかしいことであった。

「のぞみ・・・ちょっといいか？」

珍しいなぁ～のぞみはそう思いながら、リビングに入ると両親が目の前に正座して座っていた。しかも真剣な顔をして・・これってどういうこと？ひょっとして、私に就職しろということ？これでもれっきとした受験生ののぞみ・・・しかも・・・私立だけど進学校である城山高校の・・・それともリストラにあって学費がきつくなったの？そう思っているとお父さんが話しかけてきた。

「まぁ・・・座りなさい・・」

言われた通りに両親の前に、しかも正座で座ると・・・二人の雰囲気が・・・やはりおかしい・・・・こ・・・これは、やはり、リストラされたのお父さん？そう思っていたのぞみの予想だにしなかった言葉が父の口から飛び出してきた。

「のぞみ、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

「えっ～！！お見合い！？・・・どういうこと？」

私は思わず大声を上げてしまった。

# 溜息　2

「だから、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

すまなそうな顔で話している父とは対照的に横で母はにこやかな顔をして頷いていた。父の言動に困惑するのぞみ――――えっ？い・・・今・・・なんて、と父を見ると顔はマジだ・・・ど・どどどういうこと？そ・・そうよ・・これはきっと冗談よ・・そう・・・絶対そうよ・・・

「ジョ！！・・・冗談でしょ？お父さんたら～ねぇ～またまた・・そうでしょ？」

父の表情が少しやわらぎ、いつものおちゃらけた雰囲気を出してきた・・・やっぱりそうでしょう。おとうさん・・・

「そう・・冗談・・・」

少しふざけたように言おうとした時を母が制した。

「あなた！！」

えっ？お母さんまで・・・どういうことよ。再び父の表情が険しくなった。そして、母の表情も厳しくなってきた。・・・お父さん、お母さんまで、お互いの顔を見合わて頷いちゃって、しかも・・・真顔でのぞみのほうを向いた。

「本当だ・・」

嘘ーーー！！のぞみは一瞬にして思考は完全停止してしまった。何言ってるのよ～おとうさん・・・うそでしょう？しかし、本当だという言葉が何度も繰り返し頭の中を駆け巡る・・・どういうこと？のぞみはしばらく呆然とした。

「う・・そ・・よ・・ね」

「うそじゃないわよ。」

母の言葉は容赦なくめぐみに止めを刺した。

「うそでしょ・・わたし・・受験生よ」

「のぞみ～頼むから・・・」

そう言った父の方をみると土下座してるのに見て驚いた。・・ちょっと何してんのよ・・・そう思っていると母まで土下座をしはじめた

「やめてよ～おとうさん・・お母さん・・」

めぐみの言葉にも土下座をやめない二人、

そもそも原因は、のぞみの父にあった。彼の学生時代――――父が通っていた大学の親友である藤堂（とうどう）とある飲み会の席で将来自分達の子供を結婚させると約束をしてしまったことからだった。あれから数年が経ち、いい加減な父はそのことを完全に忘れていた。しかし、

ある日のこと、仕事上で藤堂と会うことになった。そして、藤堂の開口一番は「あの約束、覚えているだろうな。」だった。父は、最初は、酒の席でと話をかわそうとしたが、藤堂は本気だった。やむなく話を進めることに・・・と私の不幸の元凶を話した父の言葉にのぞみは噛み付いた。

「ちょっと待って!!この話って・・・すでに結婚が前提なの?」

あわわと再び土下座をする父は、何度も頭を上げ下げしながら

「すまない。のぞみ、本当にすまない。お父さんを許してくれ!!」

「いやよ〜!!、なぜ!!いきなり結婚なの!?」

「本当にすまない。」

とうとう父は土下座をしたまま、頭を床に当て、私のほうへ顔をあげることすらしなくなった。ん?と母を見るとにこやかな顔をしてのぞみを見ている。

「いいじゃない・・のぞみ・・行き先決まって。」

「ちょっとお母さん!!な・・なんてこと!!」

「彼氏いるの?」

「な・・・母さん!!!」

「いないのわよね。そんな男勝りじゃ・・・」

「ちょ・・・ちょっと・・」

「丁度よかったじゃない・・・」

母の容赦ない言葉はのぞみの心をジャックナイフでズタボロにした。するとその横で土下座し続ける父の侘しい声が響いてきた。

「のぞみ・・・たのむ・・」

父の方を見ると土下座して髪の毛の薄くなった頭を床に擦り付けている姿が哀れでしょうがなくなってきた。おとうさんも乗り気じゃないのに・・・ここまでするなんて・・・のぞみは、ため息交じりに返事をした。

「わかったわ・・」

そして、ガクッと肩をおとし、うつむき床の継ぎ目を私はじっと見ていた。

そんな～・・酒の席のことを・・・

はぁ～・・なんて不幸な少女なの私は・・・そう思っていると父がおもむろに顔をあげた。

「のぞみ・・・これ・・・」

のぞみは父を見るとすまなそうな顔をし差し出した目の前のファイルを見た。そのファイルはかすかに揺れているのがのぞみにもわかった。そして、何度もファイルと父の顔を交互に見た。

「これは？」

その言葉にびくっとする父――――　しばらく黙っている・・・

「これは？」

もう一度聞くと父は目を閉じふうとため息を付いて頷き、そして覚悟を決めたかのようにこう語った。

しかしその声は徐々に声が小さくなる父親・・・そして、お見合い写真を震える手でのぞみに手渡した。

「見合い相手の写真だ・・・相手の名前は、藤堂光（とうどうひかる）・・・」

藤堂光その名前はのぞみにとって、聞き覚えのある名前だった。そう彼は彼女が通う高校では知らないものはいない有名人だった。・・・・しかし、その写真を見て愕然とした・・・・おかっぱ頭のデブ・・・センスのないまるく赤いふちをしたメガネをして・・それになに、この意味のない無精ひげ・・・一瞬期待していたのぞみにとっては、悪夢そのものだった。のぞみが呆れて目をそらし父の方を向くとうつむいて目をあわそうとせず小さな声でぼそっと

「２８さい」

のぞみは目を見張って、もう一度の写真を見た。２・・・２８歳って私より１０歳も年上ってどう見てもこの人２８に見えない・・・しばらく、その写真をじっと見ていたというか固まっていたのぞみ・・・やがて・・手が震えだした。

「のぞみ？」

かすかに聞こえる母の声、どうしよう振るえが止まらない・・・

「うそ・・よ・・ね？」

私はお見合い写真がぽとりと落とした。父は、その音に気付き顔を上げた。それに気付き私が父の方を見るとさっと頭を下げ土下座の状態に戻った。

「すまん・・・」

・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

かなりの沈黙の後、

「あ～！！！！！」

のぞみの心からの叫び声に驚き両親は、思わず抱き合っていた。

どうしよう・・・

本当に娘の幸せを考えてるの？

はぁ～・・・・とため息をついて席を立った。

「どこに行くの」

母の一言に思わず両親を睨むと両親は抱き合ったままびくっとなっていた。

「寝る」

部屋に戻ったのぞみは、お見合い写真をゴミ箱のほうへ投げた。しかし、その軌道は大きく外れ、壁に直撃、偶然に壁にもたれ掛け写真がのぞみのほうに向けパカリと開いた。その写真を見て思わずそれを閉じた。のぞみはベットに倒れこんだ。なにが藤堂光よ！！そう思っているとふと同じ高校に通う藤堂の顔が浮かんだ。――――藤堂光、藤堂グループの御曹司、学校中の女子が憧れるバリバリのイケメン男子で御曹司とあって毎朝高級車でご登校。そんな彼にのぞみも憧れていた一人だった・・・でも、身分が違い過ぎる。そして、彼には、立派なご令嬢の彼女、音羽えり（おとわえり）がいる。しかもその彼女とは幼馴染ときている。どこにも入る隙もないし、うわさでは、ちょっかいを出したら、音羽さんに相当いじめられるって聞いていた。だからのぞみにとっては雲の上の存在の彼だった――――いくら同じ名前でも・・・と思い再びのお見合いの写真を見たそして、思わずその写真をゴミ箱へ投げ捨てた。

ベットの上で膝を抱えるのぞみ。横を見ると鏡に映る自分の姿が

目に入ってきた。ショートカットのヘアにごく平凡な顔立ち空手をしているせいか、どちらかと言えば男の子っぽいしなんて不幸なんだろう・・・やっぱりあのおかっぱデブとは、違いすぎる・・・いかんなんとかしないと・・・う～ん・・・何か忘れているような・・・・そうだ・・・今日告白されたんだってっけ・・・・今度は島田雄二の顔が浮かんだ・・明日返事しないと・・・ん？・・・・この見合い壊すの手伝ってくれるかな？・あ～どうしよう・・・眠れない・・・

こうして、のぞみの眠れない夜をすごした。

## 溜息　3　藤堂編

藤堂は、さっき父親から渡されたもう一度お見合いの写真をみた・・・そして、思わずゴミ箱に投げ捨てベットに倒れこんだ。親父の奴全く一体何を考えてるんだ？・・・これが藤堂が最初に思ったことだった・・

実は同じことが藤堂家でも起こっていた。

それはちょっと前のことだった。呼び出されリビングに出てきた藤堂は父の言葉に我が耳を疑った。

「来週の日曜日に婚約者と会うことになった。」

「ちょっと待て！！婚約者って！！どういうこだ！！」

ダ～ン！！！と机を思いっきり叩くと同時に藤堂は叫んだ。

「親友との約束でな、まあ・・いきなり結婚という訳にいかんから、とりあえずお見合い形式で顔をあわせることにな」

「約束って、俺何も聞いてないぞ！！」

「やかましい！！」

父親はそう怒鳴り、机を叩いた。そして、フンと鼻息を荒くして、

「光！！もう決まったことだ！！それとも、わしの顔を潰す気か！！」

立ち尽くしぐっと拳に力が入る藤堂、親父の奴！！だいだいこうなると親父は誰の言うことも聞かなくなるということを息子である藤堂自身が一番知っていた。

「けど・・」

藤堂の言葉を無視する親父は腕組みをして藤堂を睨んだ

「学校でも良い噂きかんのだが」

「なんのことだ。」

「この前の件だ・・・」

「あれは・・・」

それは、夏休みの前のある日のこと、藤堂に自転車でぶつかってきた奴がいた。そいつの両親は、藤堂の父の知り合いだった。両親は学校を辞めさせないでくれと父にまでお願いしに来ていた。しかし、藤堂のせいでその彼は１０日もしないうちに学校を去ることになった。実のところ藤堂はその彼を許し、取り巻き達には手を出すなとまで言っていたのだった。しかし、藤堂に逆らったら学校を辞めさせられる・・・そういう噂が先行していった。そして結局その彼は何もおきないまま噂に負けて学校を去った。あのことをうらんでいるのか親父は？そう思う藤堂に父親は追い討ちを掛けた。

「そろそろ落ち着いたらどうだ。」

「それとこれとは全く話が違うだろうが！！」

そんな姿を見ていた親父は、”ほれ”と言わんばかりにお見合い写真を藤堂の前に出した。

「？」

目の前に置かれた見合い写真を見て、いやな予感がした藤堂・・・・・手にした見合い写真を開こうとした時、父がこういった。

「相手だ。岡田のぞみさん２８歳」

その言葉にちょっと待て今なんていった？確か２８歳って言ったよな？そう思って父親を睨んだ。

「何睨んでんだ！！お前は年上が好きだったろ？」

ぐっと堪える藤堂、幼いときに母を早くなくした彼の初恋の人は身の回りの世話をしてくれた家政婦だった。しかし、そんなことは藤堂にとって既に過去のことだった。何をいまさら――――写真を開いて見た。その瞬間、目はこれでもかと言わんばかりに開き顔は硬直した。そして、わが目を疑った。

「・・・・（声が出ない）」

な・・なんだ？この写真？親父本気か？どう見ても４０過ぎのおばちゃんじゃねぇか？しかも、下手なというか？なんていう化粧の仕方だ？そう思ったらただ震えて・・父親を睨んだ。

「なんだその目は・・」

そこには、どう見ても少し太めのおばさんの姿が映っていた。

「・・・・・・」

「何か文句でもあるのか？」

「・・・・・・」

藤堂は無言で、部屋を後にした。

「今度の日曜日は絶対にあわせるからな！！！」

ベットに横になっている藤堂は、岡田のぞみ・・か・・そう思いながら・・・悩んでいた。ふと、幼馴染の音羽エリの顔がよぎった。学校では彼女として周りに公認されているが実のところがどうも合わないと藤堂自身は思っていた。あの性格からしてエリには頼めない・・・というか親父の奴すでに手を回してるかもしれない・・・ふと、音羽の姉、音羽静の顔が浮かんだ。しず姉ぇには迷惑はかけらない・・・どうしたらいいんだ？

こうして藤堂も眠れぬ夜をすごした。

## さいあく・・・1

この日、のぞみは最悪の目覚めを迎えた。それは、ほとんど眠ることが出来ず、うつらうつらと眠りそうになった瞬間にけたたましく鳴り響く目覚ましに叩き起こされたことによる究極の睡魔と体のだるさ。それは2度寝をして起きた後に訪れるとてつもない眠りと体のだるさの非ではないくらいつらいものとなった。何とか起き上がったのぞみだったが未だに解決の糸口は見えず頭の中は混乱したままだった。ただ今日、島田に会うこと、それがのぞみの唯一の希望の光であった。しかし、彼女の悲劇はこれだけでなかった。この後、電車に乗り遅れ、しかも次の電車は満員電車。とにかくついていなかった。

ようやく校門までたどり着いたのぞみは睡魔に襲われ朦朧とする意識の中、道路の真ん中を歩いていた。その頃一台の高級車が校門を通過して彼女の後ろに迫っていた。そして、その車はのぞみの後ろまで迫りクラクションを鳴らし始めた。しかし、のぼみはそのことに気付かず漫然とあるいていた。普通なら誰かがのぞみに声をかけるのだがその車を見て誰も動けなかった。そうその車の主は藤堂だった。

一方、車でうつらうつら藤堂はそのクラクションで目を覚ました。

「どうした?」

運転手がクラクションを鳴らすが目の前にはふらふらと歩くのぞみの姿がそこにあった。しかも、何度クラクションを鳴らしても、全く反応がない。いい加減に運転手も苛立ちクラクションの回数が増えてきた。

「なんなんだ、あの子は？ワザとか？」

目の前をふらふら歩く少女を見た藤堂――――なんなんだこいつ？どういうつもりだ？――――そう思いつつも目の前の様子を見ると、クラクションに一向に気付く気配もなくただ歩いている。これでは埒が明かないそう思った藤堂は運転手の肩を叩いた。

「いい、ここで降りる。」

「えっ？でも」

「いいから止めろ」

車から降りた藤堂はのぞみに向かって歩いて行き腕をとった。

「おい」

腕を取られたのぞみはえっ？一体何なの？ただでさえ回らない頭に突如体をゆすられ、ある種のパニック状態になっていた。もう・・・・なんなのよ！！そう思っているところへ再び藤堂が声をかけた。

「おい！！」

「なんなのよ！！一体！！」

のぞみが振り返り顔を上げるとそこには藤堂の顔があった。しまった～何故？藤堂さんがここにいるの？のぞみはそのまま固まってしまった。一方、藤堂は振り向いたのぞみが目の前に飛び込んできて、しかもその真っ赤でかすかに涙を浮かべいる目が自分をしたから見つめる姿に言葉を失った。

「あっ・・・」

しばらく見つめう二人・・・その様子を見ていたギャラリーからヒソヒソと声がしてきた。

その声に気付いた藤堂は車の方を指差した。

「よく見ろ。」

のぞみが指差されて方を見るとそこには一台の車があった。運転席からはハンドルを抱えてのぞみを睨んでいる運転手の姿が確認できた。―――やばーやっちゃった―――震える指で車をさしたのぞみは、視線を藤堂の方に向けた

「ひょっとして・・・」

「そう・・」

少し険しい顔をした藤堂がコクリとうなずいた。

「私が邪魔を・・・」

「そう・・・校門から・・・」

藤堂は、道端までのぞみの手を引いて歩いた。

「ごめんなさい。本当にワザとじゃないんです。」

まずい・・・怒鳴りつけられる・・どうしよう―――そう思いのぞ

みはひたすら藤堂に頭を下げ謝った。それはこの間の事件の時は、藤堂もマジになって怒鳴り散らしていたからだった。しかし、このときは何かが違った。車が通れるとこを間でのぞみをつれてきた藤堂は掴んでいた手を離した。

「もういいから行け！」

「ごめんなさい。」

何回も頭を下げ謝るのぞみ

「わかったから、行け。」

「ありがとうございます。」

助かった・・・そう思いのぞみはそそくさと逃げて行った。

のぞみの後姿を見送る藤堂は、しばらくして、さっきまで握っていた手をみた。―――なぜ？俺は怒らなかったんだ？そして、人波の中に消えていくのぞみの姿を目で追った。そんな時だった。ふと小さい頃を思い出した。―――ひかるちゃん偉いね～そう言って藤堂の額にキスをする少女も姿・・・あの時は、その少女の妹を怒るのを我慢したときだった。気が付くと自分の額に手を当てていた。―――いかん・・・俺は何を・・・やはり昨日のことで眠れなかったせいか？・・・藤堂は頭を振った。そして、運転手に

「ここから歩くから・・・」

そういい残し、教室に向かった。

## さいあく・・・2

あ～！！さいあく～！！！朝からなんてついてないの――――のぞみは頭を抱え自分の席にいた。やってしまった・・・・・手を引かれ一瞬で目の前に現れた藤堂の顔が浮かんできた。こういう時に限ってのぞみの頭には悪いことしか思いつかなかった。ひょっとして・・学校を追い出されるかも・・・ということはすぐ結婚？いやだ～！！・・その瞬間、さっきまで浮かんでいた藤堂の顔が思い出したくもない顔に変化した、そうおかっぱ頭をした意味のない無精ひげを生やしたデブのおっさんの顔が・・・・思わず頭を左右に振り、そして、そのまま机に伏せた。そんな時のぞみの後ろからそっと近づく二人の姿があった。親友の岩崎裕子と大山美由紀だった。

「のぞみ～見たわよ～」

「うるさい・・」

のぞみは、ふと顔を上げ・・・・はぁ～とため息をつきうつむいた。その肩に手を掛けた岩崎

「どうしたの？元気ないね。」

「いや。別に・・」

目の前に立つ二人を見たのぞみ・・・再びため息を付いた。それを見ていた大山はそっと後ろに回った。

「本当？」

そう言って、のぞみの首を絞めた。

「ぐぁ～！！」

いきなり首を絞められたのぞみはのけぞった、その状態で大山は質問をした。

「よく、あんなことできたわね～」

「は・・はなして・・」

のぞみは、大山の手を軽く叩いた。そして、ようやく首を開放した大山の前で首を押さえしばらく咳き込んだ。ふぅとため息を付いて二人を見た。

「あんなことって？」

のぞみの言葉に目が点になる二人・・・

「ちょっと！！大丈夫、のぞみ！！」

今度は岩崎がのぞみの両肩を持って前後に激しくゆすった。その揺れにあわせ首が前後するのぞみは両手で岩崎の肩を持ってゆするのを止めた。

「裕子、だからなんなのよ！！！」

「だから、今朝のことよ・・・」

「今朝って？」

「藤堂さんの件よ、」

「あ・・あれね・・」

「あれねって、のぞみが追い出されるって、もう学校中大騒ぎよ！！」

のぞみは、二人を交互に見て、溜息をついた。このまま追い出されたら・・・ふとさっきの不気味な顔がのぞみの頭をよぎった。あ～！！と叫びながら、頭を数度横に振っているを見て、心配する二人

「のぞみ・・・大丈夫」

「とにかく、藤堂さんに謝りに行きましょう！！！ね」

そう言って大山がのぞみを手を引いた時、

「ほっといてよ、それどころじゃないのよ。あ～！！もう終わりよ！！」

そう言ってのぞみはその手を振りほどき、頭を抱え込んで再び机に伏せた。この不可解な行動に、おろおろする二人だったが、ある人物が目に入って思わずのぞみから離れた。

机に伏せていたのぞみは、フト暗くなったのに気付いた。どうしたんだろう、ひょっとして眠ってしまったの？そう思って見上げるとそこには、音羽えりとその仲間が立っていた。頭が混乱しているのぞみには、何故彼女がここに来たかが理解できずに・・・・音羽とその愉快な仲間達だ・・・ただそう思っていた。ふと見ると岩崎と

大山の姿がなかった。どこ行ったのとあたりをキョロキョロしていると教室の片隅に二人が逃げていたを見つけた。あの二人・・・・そう思っていたら、目の前で腕を組んで立っている音羽がのぞみを睨み声をかけてきた。

「ちょっと！！あなた」

そう言われたのぞみは、辺りを見回して音羽の方を向いた。そして、のぞみは自分を指差し聞き返した。

「ひょっとして？」

「あなた以外に誰がいるの？」

えっ？何で私なの？そう驚いてるのぞみに音羽は話を続けた。

「あなたに警告しに来たの」

「警告って？」

どういうこと？のぞみは不思議そうに首をかしげた。その行動を見て音羽は眉間にしわを寄せのぞみを睨んだ。

「そう・・あなた・・・自覚なさそうね」

「なにを？」

「本当に・・・しらばっくれて！！」

「えっ？」

「藤堂さんの車が通るのを邪魔したでしょう！！！」

音羽の声のトーンが徐々に上がってきた。のぞみは音羽の声に押され座ったまま少しのけぞった。その時、のぞみを再び睡魔が襲ってきた。そして、音羽の前で大あくびをした

「ただ、眠たかっただけなの。うぁああ」

その顔を見てあきれた音羽は、一度横を向いて息をふっと吐いた・・・

「まぁ～今日は見逃したげるわ・・ふん」

そう言い残して音羽たちは教室を去って行った。

しばらくして、近寄ってきた岩崎と大山・・・

「なに・・・あれ・・・」

「なに・・・って、あんた達、」

のぞみ急にキョロリ、キョロリと二人を見て

「えっ・・・どうしたの？急に元気出して・・」

「あなたたち・・・私を見捨てて逃げたでしょう？お仕置きよ」

## さいあく・・・3

頬杖を突いて席に座っている藤堂は、さっき手を引っ張った時、振り返ってきた彼女の顔が思い浮かんだ。そんな時、俺どうしたんだ？何故あいつの顔が気になるんだ？そう思っていると横から聞きなれた声が耳に飛び込んできた。

「よう。藤堂」

そう言ってポンと肩を叩いた小宮真、そして、井上豊は笑いながら鼻しけてきた。

「どうしたんだ。藤堂。今朝のあれ。」

藤堂は頬杖を着いたまま二人から目をそらしため息混じりに声を漏らした。

「あ～あれか・・・」

元気ののない藤道に二人は顔を見合わせた。そして、井上が藤堂に肩を組んで

「いつもならもっと怒ってたろう。」

「そうか？」

力なく答える藤堂・・・

「そういえば・・・元気ないな・・・・どうした？」

小宮が藤堂の顔を見て、聞いてきた。

「いや・・なんでもない。」

味気ない返事に井上と小宮は顔を見合わせ、首をかしげた。そこへ音羽が教室に入ってきた。

「光(ひかる)」

「おっ・・彼女のお出ましだ・・・」

藤堂は、ちらりと音羽に目をやり、ふぅ～とため息を付いた。

「どうしたの。？」

音羽は、不思議そうに見て、藤堂の前に座る。

「なんでもない・・・・」

そういうと藤堂は音羽から目をそらした。

小宮と井上の方を見た音羽は、藤堂を指差し

「？」

二人は、両手を挙げ、わからないそぶりを見せた。

「まっ・・いっか・・・今朝の見たわよ」

「何を？」

「あれか？」

まともに返事をしない藤堂に

「どうしたの。本当に」

「なんでもない・・」

「そう？・・・ところで、今週の日曜日あいてる？」

音羽が聞くと藤堂は、さらにため息をついて

「その日は、用事がある。」

「あっそう・・・じゃぁ今度ね・・・」

そう言って音羽は立ち上がり小宮と井上に

「どうしたの」

「朝からあのまま・・・・俺達にもわからん。」

「そう」

音羽は教室を後にした。

昼休み、藤堂は、礼拝堂の裏にあるベンチに腰掛けていた。この場所は藤堂のお気に入りの場所で一人でいることが多かった。藤堂は悩んでいた・・・親父の奴・・・一体何を考えてるんだ？なぜ、今なんだ？そこへのぞみが一人で歩いて来るのが目に入った。あの女、今朝の・・・と気付いた藤堂はその様子を見ていた。

のぞみは昼休みに入ってすぐに、昨日島田と会った場所へ向かった。――昼休みよね。確か――そう思いしばらく携帯の時計を見ながら待っていた。――遅い・・・ひょっとして昨日のはうそなの？それとも今朝のことで・・・あっ来た――と目の前に島田の姿を確認した。

「岡田さん・・・」

島田が声をかけて近づいてくる様子を見て少しもじもじするのぞみ――来てくれたってことは、――のぞみの前に来た島田を見て少しうつむいた。

「あの・・」

のぞみが決心して、話そうとした時だった。島田の様子がおかしいのに気付いた。それは目を大きく見開いて、のぞみの後ろを見ていた。

――あれ～どうしたんだろう？

「岡田さん・・・」

「はい・・」

そう答えたのぞみの肩に誰かの腕がずしっと乗っかった。その衝撃に驚いて振り向くとそこには藤堂が立っていた。

「と・・・藤堂さん？」

その声にチラッとのぞみを見た藤堂は視線をすぐに島田の方へ向けた。何故藤堂さんがここにいるの？のぞみがそう思っていると藤堂が島田に話しかけた。

「島田・・・この娘と話があるんだけど、はずしてくれないか？」

「え？けど・・」

しばらく固まる島田・・・島田君逃げないでと祈るのぞみを無視して、島田に睨む藤堂

「昼休み終るんだけど・・」

「岡田・・・悪いわ。」

そそくさと逃げようとする島田

「あっ・・・ちょっと」

のぞみが止めようとするが島田は逃げて行った。

「じゃぁ・・・」

「島田君・・・」

のぞみが言った言葉にはむなしさしか帰ってこなかった。あ・・・のぞみの心の叫びは届かぬまま、島田の姿は校舎の影に消えていった。どうしよう・・・そう思って振り向くとそこには、少しにやけた表情の藤堂が立っていた。

「何てことするの？」

のぞみは思わず言ってしまった。その言葉を聞いてしばらくのぞみの顔を見た藤堂、こいつだったら・・・いけるかもそう思い。のぞみの顔を指差した。

「今朝の事といい・・・いい度胸してるなぁ～」

「えっ・・・」

「名前は？」

「えっ？」

「だから・・・名前は？」

「岡田のぞみ・・・」

仕方なしに答えるのぞみ・・・岡田のぞみと聞いて、藤堂は、お見合い写真を思い出した。そして、のぞみをもう一度よく見ようと近づいた。

近づいてくる藤堂・・・な・・・何故？近づいてくるの？そう思いつつ少しづつ後ろにさがるのぞみ・・・

「な・・・なんなのよ！！」

「ふ～ん・・・岡田のぞみ・・・か」

さらに近づいてくる藤堂・・・・やがて、のぞみの背中が壁にドンと当たった。えっ？さ・・下がれない・・・どうしよう・・・のぞみがそう思っていると藤堂の右手が伸びてきた。思わず目をつぶるのぞみ・・・その手は、のぞみの顔をかすめバンと壁についた、

そして

「気に入った。・・・」

「えっ？」

その言葉に驚き目を開けると藤堂の顔が目の前にあった。なんなのよ～！！今朝の仕返し？そう思っているのぞみに藤堂はやさしく語りかけた。

「しばらく、俺の彼女にならないか」

## さいあく・・・4

い・・今・・・なんて言ったの――――確か彼女って言ったわよね・・・・のぞみの思考は3秒ほど止まった。ふと藤堂を見るとち・・ちかい・・・それもそのはず、彼の顔が目の間じかにあったからだった。そして、藤堂からの驚きの一言に思わず聞き返した。

「いま・・なんて？」

小首をかしげているのぞみに対し藤堂は、冷静に答えた。

「だから、彼女にならないか？」

「誰の？」

「俺の」

「私が？」

そう聞き返すと藤堂は軽く頷いた。のぞみは混乱した、何言ってるのこの人、音羽さんて彼女がいるくせに・・一体何考えてるのよ・・・と言うより、私の・・・・・と島田とのことを邪魔をされたことを思い出した。そして、、ふぅ～と息を吸って

「何言ってるのよ。」

藤堂はにやりと不適な笑みを浮かべた

「彼氏もいないだろう。」

あ～頭にくる・・・のぞみは、藤堂を睨み返した。

「あんたには、関係ないでしょ！」

藤堂はフンフンと頷きながら、のぞみの顔を指差した。

「まぁ・・・関係ないけど・・・でも、こんなにいい条件はないぞ。」

いい条件って・・・確かに条件はいいけど・・・音羽さんはどうするのよ・・・のぞみは、その指を持ってそれを振りほどいた

「それに、立派な彼女がいるじゃない。」

「あ～あいつか・・・あいつじゃだめなんだ・・・」

「なぜ？」

はぁ・・今なんて？・・・藤堂さん・・・あなた・・・彼女がいるのにただでさえ・・・ややこしいのに・・・しかもあの音羽さんなのに・・・彼女が今の状況知ったらどうなるのよ・・・・本当に・・・・

藤堂としては、いい加減に折れろよ・・・ほんと－－－－！！！に面倒な奴だな・・・エリじゃダメなんだよ・・今回のことは・・・だんだんと苛々してきた。

「あいつじゃぁ、駄目なんだ。」

「だから。なぜ？」

「俺がいやなんだ！！！」

藤堂の言葉にしばらく、固まる二人、なんなのこいつ？自分の彼女が嫌なんて？のぞみは呆れた。少し大きく息を吸った。

「嫌よ！！」

「嫌とはなんだ嫌とは！」

こいつ一体・・・俺のどこが嫌なんだ？だんだんと声のトーンが上がる藤堂

「嫌なものは、いやよ。」

「そうか・・・どうしても嫌か」

「ええ・・」

のぞみがそう言った次の瞬間、藤堂の左手がのぞみの顎をそっと持ち上げ、のぞみの唇に藤堂の唇が重なった。

「！！！！」

のぞみは目を見開いて硬直した。

目の前には藤堂の顔が・・・・

そして、唇には感触が・・・・・

と・・藤堂さんと・・・

キ・・・キスしてるの？わたし？

頭の中は、真っ白だった・・・・・

やがて唇がそっと離れ、藤堂がのぞみをじっと見つめる

のぞみは硬直し、ただ藤堂の目を見ていた。

キ・・・キスされた・・・藤堂さんが見ている・・・

顔が熱い・・・どうしよう・・・

そう思っていると藤堂が話しかけてきた。

「これで・・・いいか？」

その言葉でわれに返ったのぞみは、唇を両手で覆った。

「これで・・・付き合ってくれるか？」

話が言い終わる前にのぞみの右手が藤堂に炸裂した。

パチーン！！！

「えっ？」

藤堂は、叩かれた頬を押さえのぞみを見るとその目には涙が・・・

「嫌よ！！」

そう言って、のぞみは、走り去っていった。

「おい・・待て・・」

なんなのよ・・・

もう最低・・・・

のぞみはその場を去って行った。

**長い夜・・・**

のぞみの背中を見送る藤堂、彼女の姿がが後者の角に隠れるまで見送っていた。そして、見えなくなると叩かれた頬がジーンとしてきた。その叩かれた頬に手を当て、呆然と立つ藤堂――――ふと幼い頃に注意され叩かれた時の記憶が甦ってきた。その時も理由は覚えてないが彼女の妹を泣かせた時だった。藤堂を叩いた彼女も涙に目を浮かべ

「女の子を泣かせちゃダメでしょ！！」

そう叫んでいた。そのことを思い出した藤堂・・・しばらくして、とぼとぼと歩き溜息をついた。俺は一体何をやっているんだ？ただなんとなく胸が痛い・・・そのまま学校を後にした。

教室に戻って来て、すぐさま、鞄をもって教室を出ようとするのぞみに驚いた大山と岩崎

「どうしたの？のぞみ」

「帰る。」

「どうしたのよ。のぞみ！！」

「帰るの！！」

そう言って教室を出ようとするのぞみを大山が肩を引っ張った。

「あ・・」

振り返ったのぞみの顔を見て言葉を失った、大山と岩崎・・・のぞみの目には涙が・・・

「じゃ・・」

ただ呆然とのぞみを見送った二人だった。

放課後、のぞみのクラスは騒然となった。それは、また、音羽がやってきたからだった。藤堂が帰ってことを知った音羽に間が悪いことに井上がボソッと適当に言ったことが原因だった。

「藤堂さんどうしたの？」

「帰った」

「なぜ？」

「今朝のことで・・・なんかあったみたい。」

その言葉を聞いた音羽、あの娘、警告を無視して・・・キッと目が鋭くなった。そして、いつもの仲間を連れて、のぞみの部屋に向かった。

「あの娘どこ？」

突如、現れた音羽に教室はざわついた。そして、クラスの一同が音羽の行動に引いた。

「あの娘は？」

そう言って、逃げ惑うのぞみのクラスメートの一人を捕まえた。

「あの娘、どこ行ったの？」

「え・・ええ・・・・・昼休みが終ったら帰りました。」

「えっ？」

音羽は拍子抜けした。なに～！！帰ったって？どういうこと？

「本当に？」

「はい・・」

「ま・・いいわ・・・」

そういい残し音羽は帰って行った。

それから、しばらくしてのことだった。島田がひょこっりと現れたのは、そして、大山から帰ったことを聞いて、肩を落とし帰って行った。

家に帰ったのぞみ、一人ベットの上で膝を抱いて泣いていた・・・もう・・・最悪・・・なんでこんなことに？島田君を巻き込もうとしたから？今朝のことを思い出した・・・・このままじゃ・・・学校も追い出され、無理矢理あいつと結婚するの？ふとあのお見合い写真が頭に浮かんだ・・・・あ～あ～嫌だ！！！一人抱えた膝の上に顔をこすり付けていた。どうしよう・・・嫌だ・・・こんなの嫌だ・・そう思った瞬間、学校での藤堂光とのことを思い出した。

「俺の彼女にならないか？」

その言葉を思い出した瞬間、藤堂のドアップ・・・そして、キスを思い出した・・・思わず唇を触ったのぞみ・・・キ・・・キス・・・したんだ私・・・あの藤堂さんと・・・・しかも・・・ファーストキス・・・唇にはあのときの感触が甦ってきた・・・・一瞬で顔が暑くなり、心臓の鼓動が激しく高鳴った。そんな時だった携帯が鳴り出したのは・・・はっと我に帰ったのぞみは、携帯をとり表示を見ると大山からだった。

「もしもし～」

「のぞみ～！！！大丈夫？」

「うん。」

「どうしたのよ～。」

「なんでもないってば～」

「そう？本当に大丈夫？」

「うん。」

そう言っているのぞみだったが、目から涙が出ていた。

「ほら・・泣いてるでしょう・・」

「大丈夫だってば・・・」

「そう・・・じゃぁ・・・のぞみが帰った後の話なんだけど・・・」

「うん。」

「音羽さんがきたのよ・・」

「うん」

「でも、のぞみいないから～すぐ帰ったんだけどね・・・」

「うん・・」

「それと・・・」

「・・・」

「聞いてる？」

「うん・・聞いてるよ・・」

「島田君、来たのよ。のぞみを探しに・・・」

「えっ？」

「だから・・島田君が来たの・・・ひょっとして、のぞみ、付き合ってるの？」

「付き合ってないわよ・・」

「あ・・そう・・・じゃぁ・・早く元気になってよ」

「うん・・・ありがとう・・」

「じゃぁ・・」

切れた携帯を見たのぞみ・・・・そうだ・・・島田君を巻き込んだらいけないんだ。明日、言わないと付き合えないって・・・・そこには、一人膝を抱えたのぞみの姿があった。

藤堂も一人自分の部屋でじっとしていた。そして、思わずキスをしてしまったことを思い出した。何故あんなことを・・・・そう思っていると、携帯がなった。音羽からだった。しばらく放置していたのだが鳴り止まない・・・・仕方なくとることにした。

「もしもし・・・」

「あ・・光？聞いてよ・・・」

音羽の甲高い声が藤堂の頭に響いてきた。

「ごめん・・・切る・・・」

そう言おうとした瞬間、音羽の話に切ることが出来なくなった。

「あの娘のことなんだけど・・・聞いてる？」

あの娘その言葉・・・・岡田のことだ・・・・そう思うと思わすぐっと手に力が入っていた。

「ああ・・」

「あの娘も学校辞めるの時間の問題よ。」

「えっ？」

「だって～昼休み終ったら帰ったんだって」

「そうか・・じゃぁ・・」

「もう一つあるんだけど・・・・」

「まだあるのか？」

「実は・・・」

「えっ？」

その言葉に藤堂は我が耳を疑った・・・・

「実は・・・お姉ちゃんの婚約が決まったの・・」

「あ・・そう・・」

「ちょっと～聞いてる？」

思わず携帯を下ろし、音にならないため息をついた。しず姉(しずねぇ)が婚約？・・・しず姉・・・・藤堂の幼馴染でしかも片思いの相手だった。しかし、彼女は妹のエリ思いでもあり、彼女自身にとって、藤堂は弟みたいな存在だった。それをわかっていた藤堂・・・そして、藤堂が中学くらいになった時、彼女は従兄の隆と付き合い始めていた。だから、藤堂は気持ちを伝えることすら出来なかった。現実を突きつけられた藤堂・・・婚約・・・か・・・その時、再びのぞみの顔が浮かんだ・・・

## 心の整理

鳴り止まぬ目覚まし、けだるい体・・・思うように動こうとしない体、そんな状態でようやく起き上がったのぞみ・・・洗面台を前にして、真っ赤に腫れた目を見て、学校に行きたくない・・・しかし・・・行かねば・・・こうして何とか学校までたどり着き、島田の下駄箱に、メモをこそっと置き、その時を待った。

一方、音羽はのぞみが学校に来ていることを知り激怒していた。今日こそ、わからせてやるから・・・

そして、昼休みがきた。のぞみは島田が来るのを待っていた。昨日と同じ場所で・・・その頃、藤堂もいつもの礼拝堂の裏のベンチで一人考え事をしていた。しず姉が婚約・・・か・・・少し天を仰いだ、そんな時に思い浮かぶのがのぞみの顔だった。今朝も車の中で横を通り過ぎるのぞみの顔を見た。今日も暗い顔をしていた。そういえば、彼女と会ってから彼女の笑顔を見たことがないな・・・そんな時だった。のぞみの声が聞こえてきたのは・・・・

「島田君・・・来てくれてありがとう」

その声を聞いて、こそっと除いた藤堂・・・あいつ・・また、島田と会って・・と声のする方を覗いた。のぞみは、深々と頭を下げ、しばらくして、顔を上げると島田は右手で頭をかき少しうつむいて

「俺こそ・・・ごめん・・・」

島田の意外な言葉に驚くのぞみ・・・・

「えっ？」

「許してくれ・・・昨日は、藤堂が急に現れて驚いたんだ。けど・・・・俺は・・・・」

「島田君やめて!!」

島田の話を止めて叫んだのぞみ・・・

「私こそごめんなさい・・・こんなことに巻き込んで・・」

その時だった。のぞみはふわっと抱きしめられた・・・・驚き・・・思わず目を見張った・・・島田君に抱きしめられている・・・・頭に血が上っていくのがわかった。

「昨日は、ごめん・・・俺が・・俺が悪かった・・・」

島田の声が耳元でそっと入ってきた。その言葉に思わず目をつぶるのぞみ・・・・

その光景を見ていた藤堂――――壁を持つ手に力が入っていた。あのやろう・・・そう思った瞬間、のぞみが島田の手を解いた。

島田に抱きしめられたのぞみ、目を閉じた瞬間、藤堂の顔が浮かんだ――――そうだちゃんとしないと――――そして、両手で島田の胸をそっと押し、彼の腕の中から抜けた

「ごめんね・・・島田君・・・・気持ちはありがたいんだけど・・・」

「なぜだ・・・藤堂のせいか?」

「うん・・巻き込みたくないの島田君を」

「岡田！！！俺がお前を守ってやる・・・だから・・」

その言葉を聞いてのぞみはうつむいて、島田から目を反らした・・・

「・・・その気持ち・・・嬉しいけど・・・」

「けど・・」

「ごめんなさい・・」

「俺じゃダメなのか？」

「ごめんなさい・・」

「なぜ・・」

「・・・・」

のぞみは両手をぐっと握り締めた。キッと目を見開いていった。

「私・・・婚約者がいるの・・・」

「えっ？」

「だから付き合えないの、本当にごめんなさい」

そう言って、のぞみは頭を下げた・・・その言葉を聞いて驚く島田・・・

「うそだろう」

のぞみは黙って首を横に振った。島田は、のぞみの顔を見て、溜息をつき、肩を落として去って行った。そして、ぞみに婚約者がいると聞いて驚いた藤堂は、天を仰いだ。

## どうして・・そうなるの？　1

溜息をついたのぞみ・・・

一人、たたずみ肩を落とした。

これで良いんだ――――これ以上、島田君に迷惑掛けれないもん・・・

・これで・・・これで・・いいんだ・・・そう思っているのぞみの心は晴れやかだった。

そして、大きく息を吸って、よしと気合を入れた時だった。

「岡田！！」

後ろからどこかで聞いた声がした。ま・・まさか・・・・

「岡田！！」

その声は、確実に近くなってきている・・・のぞみは、そっと後ろを振り向いて、声の主を確認した

やはり・・・思わず目をつぶり、前を向いた・・・・なんで？藤堂さんがここにいるのよ・・・・・

こいつ俺を見たのに無視か？藤堂は、目の前でうつむいているのぞみの背中を見つめ近づいた。そして、さっきのことを思い出した・・

・「私・・・婚約者がいるの・・」その言葉を聞いて思わず天を仰いだ・・・その時だった・・・婚約者って事は、こいつは本気にな

ることはない・・・・やはり・・俺の彼女をやるのはこいつだ・・・・
そう確信した。

肩をポンと叩かれビクッと背筋を伸ばしたのぞみは怪訝そうな顔をして藤堂を見た。

「と・・藤堂さん・・」

「岡田・・・そんな顔をするなよ・・・」

「えっ？」

「昨日の件だけど・・・」

「それは断ったでしょう。」

「もう一度、考え直してくれないか？」

「え？」

その時だった学校のチャイムが鳴り響いた。藤堂は、ポンとのぞみの肩を叩いて

「じゃ・・・放課後、ここで」

そう言い残して、藤堂は走り去って行った。

ええ～～！！！どういうことよ！！！そう心で叫んでいたのぞみ、チャイムが鳴ったのも忘れしばらくその場に立ち尽くしていた。

そして、もう一人この話を聞いていたものがいた。それは、音羽だった・・・昨日の件って一体何よ・・断ったって・・・どういうこと？・・・あの娘・・・許さないから・・・

慌てて教室に戻ったのぞみだったが、１０分以上授業に遅れ、先生にこっぴどく叱られた。貴様！それでも受験生か？とか、やる気があるのか？さんざん吼えまくる先生を前に、なんでこうなるのよ～！！そう思いつつも、ただ・・はい、すみません・・と謝り続けること5分、先生の説教から開放され、ようやく席に着くことが出来たのぞみだったが、それどこれではなかった――――話って、一体なんなのよ・・・昨日、断ったのに・・・・どういうこと、藤堂の言葉が頭の中を駆け巡り授業が身に入らなかった。

そして、放課後になっても、藤堂の言葉が耳から離れないのぞみが、どうしようと悩みながらさっきの場所に向かってとぼとぼと歩いていると音羽たちが取り囲んだ。

「ちょっとあなた、いい？」

中庭に連れて行かれるのぞみ・・・・藤堂はその光景を教室から見つけた、エリの奴何をしてるんだ？あいつを囲んで・・・そう思いつつも、しばらく、傍観することにした

のぞみは壁の方に追いやられ、数人に囲まれた。目の前には音羽がいた。

「返事次第じゃ、ただじゃおかないわよ・・・」

「一体何のことよ？」

睨みつけてくる音羽を首をかしげながら見たのぞみ――――あなたは一体何が言いたいの？本当に意味がわからなかった。呆然と見てくるのぞみに苛立つ音羽は、両腕を組んで、さらに怖い顔で睨んだ。

「藤堂さんを横取りする気？」

両目を大きく開いて驚くのぞみは口を大きく開けた。

「はぁ～？」

## どうして・・そうなるの？　2

音羽の口から飛び出だ”横取り”と言う言葉に驚きのあまり思わず変な声を出してしまったのぞみ――――今・・横取り・・て・・どうしてそんなに話が飛ぶの・・・としばらく考えると・・・・ひょっとして、藤堂さんの話を・・・それって、完全にまずいってば・・・とにかく逃げないと・・・そう思っていると音羽がさらに近づいてきてのぞみの顔を指差した。

「とぼけるき？」

怒りをあらわにする音羽に対しのぞみは両手で抑えてと訴えた。

「ちょ・・・ちょっと・・・どういうことですか？」

「やけに親しいようね・・・」

「え」

音羽の言葉に驚くのぞみ

「本当にとぼける気ね？」

「いい加減にしてよ！！私が何をしたって言うの？」

「だから、昨日の件って何よ」

「えっ？」

「本当にあなたって人は、顔を見るだけでムカつくわ、どういう手を使ったのよ！！」

そう言って音羽はのぞみの胸倉を掴んできた。その手をふりほどいたのぞみ

「いい加減にしてよ！！私、何もしてないわよ！！じゃぁ・・」

「待ちなさいよ！！」

そう叫ぶ音羽を無視してのぞみがその場から立ち去ろうとした時、のぞみは目の前に藤堂が立っているのを見つけ、――――また、頭が痛いのが来た――――うつむき左手で頭を抑えた

「藤堂さん！」

声を出す音羽を無視して、藤堂はのぞみの声をかけた。

「おい！」

その言葉に頭を軽く振ったのぞみは、ふぅ～と息をして、藤堂を指差し怒鳴った。

「こんなことしたのあんたなの？」

「俺じゃないよ。こいつだよ」

藤堂は、音羽を指差した。それにたじろいだ彼女は数歩下がったが、その場から離れようとしなかった・・・

「わ・・・わたしは」

その様子を見た藤堂・・・

「悪いがはずしてくれないか・・・」

「えっ？」

「エリ・・悪いが・・・はずしてくれないか？」

「どうして？」

藤堂はのぞみを指差した。

「こいつと話があるんだ！！」

「でも・・」

そういう音羽を藤堂はにらみつけた。

「俺の言うことを聞けないのか！！」

「わ・・・わたし・・」

「エリ！！」

藤堂の言葉に慌てて逃げる音羽・・・

それを見てた藤堂は、のぞみをじっと見ていたら、後ろの方で音羽の姿がチラチラと見えた。チッと軽く舌打ちをして、のぞみの方に歩いていった。そして、通りすがりに耳元と囁いた

「1時間後、ここに来い」

「えっ？」

「じゃぁ・・・」

驚いているのぞみの肩をポンと叩いて、藤堂は去って行った。――――い・・・1時間後って？どういうこと？振り返ると藤堂は右手を振って去って行った。

一方、音羽は、慌てて藤堂を追いかけた。

「ごめんなさい」

藤堂はチラリと音羽の方を見た。

「俺・・・疲れたから帰るわ・・・」

「えっ？」

「じゃぁ・・」

「光・・・・ごめんなさい・・・」

音羽はきゅっと藤堂の服のすそを掴んだ。それを見た藤堂は、

「わるいが・・・俺・・・疲れてんだ・・・」

「あっ・・・」

音羽が思わずその手をはずしたのを見た藤堂は、しばらく考え

「エリ・・」

「えっ？」

藤堂の言葉に、エリの顔に少し笑みが戻った

「じゃ・・・待っているから・・」

そう言って走り去ったエリを見て、藤堂は、車に乗った。

「一時間したら戻るぞ・・・」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2818z/

ＵＳＯよね・・・

2011年12月20日21時51分発行